

キルルートのスウィフト

岸本 広司

サー・ウィリアム・テンブルの秘書を務めていたジョナサン・スウィフト (Jonathan Swift, 1667-1745) は、僧職に就くために、テンブルの反対を押し切ってアイルランドに向かい、1695年にキルルートの教区牧師となった。キルルートでの生活はわずか1年あまりであったが、聖職者としてのその後の人生を考えると、アイルランド教会の1教区であるキルルートの受禄僧として出発したことは重要である。本稿は、キルルートの受禄僧となった経緯、アイルランド教会の組織、キルルートでの暮らしやヴァリーナとの出会い等を考察した。

Keywords : ジョナサン・スウィフト, アイルランド教会, キルルート, ヴァリーナ

I

サー・ウィリアム・テンブルからの独立を果たしたスウィフトは、生国アイルランドで聖職に就くことになった。すなわち、テンブルに身元証明書を書いてもらったスウィフトは、まず1694年10月28日に、ダブリンのクライスト・チャーチ大聖堂でキルデア主教のウィリアム・モートンによって執事 (deacon) に任じられた。執事とは、教区の職務を助けるが聖餐を執り行うことのできない聖職位である。次いで95年1月13日に、同じくモートンによって司祭 (priest) に任じられた。司祭とは執事よりも上位で、聖職禄 (prebend) を授けられ聖餐の司式をする権能を与えられた聖職位である。受禄聖職者特定任地 (benefice) は程なくして与えられた。司祭に任命されて半月後の1月28日、キルルート (Kilroot) の受禄僧 (prebendary) として推薦されたのである。27歳であった。年収は約100ポンド、推薦者はアイルランド控訴院判事 (Lord Justice of Ireland) で、同年5月にアイルランド総督代理 (Lord Deputy of Ireland) となるサー・ヘンリ・ケイブルであった⁽¹⁾。ケイブルはかつてテンブルとともに枢密顧問官を務め、邸宅もシーンのテンブル邸の近くにあった。こうした縁から、ルイス・ランダも指摘したように、スウィフトのためにケイブルに推薦を依頼したのはテンブルであったのかもしれ

ない⁽²⁾。しかし、これを証明する確たる証拠はない。

キルルートは北アイルランドのベルファスト湾北岸に位置し、ダブリンから約110マイル北方のアントリム州カリクファーガス (Carrickfergus) にほど近い教区である。スウィフトにとっては、アイルランドにおける最初の長旅であった。彼は海岸線に沿って北上し、ダブリンから約30マイルのドロイダ (Dorogheda) でポイン川を渡ったはずである。言うまでもなくそこは、4年あまり前の1690年7月1日に、25,000のジェームズ軍と36,000のウィリアム軍が戦火を交え、ウィリアムが歴史的勝利を収めたいわゆる「ポイン川会戦」 (Battle of the Boyne) の地である。おそらくスウィフトは、会戦の数ヵ月後に書いたウィリアム王に捧げる頌詩を思い起こしたことであろう。そこではこう詠まれていた。

I see the fatal fight begin;
And, lo! where a destroying angel stands,
(By all but heaven and me unseen,)
With lightning in his eyes, and thunder in his hands;
'In vain', said he, 'does utmost Thule [Ireland] boast
No poisonous beast will in her breed,
Or no infectious weed,

When she sends forth such a malignant birth,
 When man himself's the vermin of her earth;
 When Treason there in person seems to stand,
 And Rebel is the growth and manufacture of the
 land.'

He spake, and a dark cloud flung o'er his light,
 And hid him from poetic sight,
 And(I believe)began himself the fight,
 For straight I saw the field maintained,
 And what I used to laugh at in romance,
 And thought too great even for the effects of
 chance,
 The battle almost by great William's single valour
 gained;

.....
 Our prince has charmed its many hundred eyes;
 Has lulled the monster in a deep
 And (I hope) an eternal sleep
 And has at last redeemed the mighty prize.

When some patrician god would visit the immortal
 gaol,

The very brightness of his face
 Suspended every horror of the place,
 The giants under Etna ceased to groan,
 And Sisyphus lay sleeping on his stone.
 Thus has our Prince completed every victory,
 And glad Iérne now may see
 Her sister isles are conquered too as well as she ⁽³⁾

ウィリアム王にとってこの地はジェームズ軍を壊滅させ、国教会主義によるアイルランド支配体制を確立させた記念碑的な場所であった。これ以降、アイルランドは宗教的・政治的・経済的に完全にイングランドの従属的地位に置かれるようになる。テンブルの影響下にあったスウィフトが、ウィリアムの勝利を高らかに称えたのはまさしくこのようなときであった。しかしその勝利が、やがてアイルランドに悲劇をもたらす原因のひとつとなることに彼は気づいていなかった。否、生涯を通じて気づかなかった。アイルランドの問題を告発するばかりで、その真の原因を問い詰めず、問題解決に有効な策を提示しえなかった文人スウィフトの限界であろう。

II

さて、スウィフトはドロイダからさらに北への旅を続け、ダンドーク (Dundalk)、ニューリ (Newry) を経てベルファストに入り、そこからベ

ルファスト湾岸沿いにカリクファーガスへと向かった。ベルファストから約10マイルのカリクファーガスは、1690年6月14日、つまり先の「ボイン川会戦」の半月前にウィリアム3世が上陸した要塞の町である。キルルートは、このカリクファーガスから北東の方角に位置する小さな古い田舎町であった。キルルートという名前は、「赤い教会」を意味するアイルランド語の Cill Ruaidh に由来するが⁽⁴⁾、1695年3月にこの地に到着したスウィフトは大きな失望を感じたに違いない。というのは、そこには牧師館も教会付属地もなかったからである。かろうじてあったのは、海岸近くの卵形をした質素な小家屋だけであった⁽⁵⁾。しかも、国教徒の数がきわめて少ない貧寒の地であったのである。

周知のように、ヘンリ8世の宗教改革によってイギリス国教会 (Church of England) が成立したが、1541年にヘンリがダブリンの議会からアイルランド国王の称号と教会に対する至上権を承認されると、国教会制度はアイルランドにも持ち込まれた。アイルランド教会 (Church of Ireland)、すなわちアイルランドにおけるイギリス国教会である。しかし、カトリック教徒である既存住民の改宗にはほとんど成功せず、国教会に帰属する者はごく少数に限られていた⁽⁶⁾。

スウィフトの時代までに、アイルランドの住民は主として次の4つのグループから構成されていた。第1に、先住ゲール人＝アイルランド人、第2に、12世紀以来のノルマン系イギリス人で、多くは結婚によってアイルランド人と同化しているオールド・イングリッシュ、第3に、16世紀の後半以降、とくにクロムウェルの時代にイングランドから入植してアイルランドに定着したニュー・イングリッシュとスコットランドからの移住者、第4に、アイルランド総督に代表されるイギリス人行政官たちである。政治的・宗教的には、第1のグループはアイルランドにおけるイングランド王権の正統性を認めないカトリック⁽⁷⁾、第2のグループのオールド・イングリッシュは、イングランド王権に忠誠を誓いながらも信仰面では先住ゲール人と同様カトリック⁽⁸⁾、第3のグループのニュー・イングリッシュは、政治的にも宗教的にもイングランドの王権に忠実な国教徒、そしてスコットランドからの移住者は長老派、第4のグループは国王行政官としてのエリート支配層で、宗教的には言うまでもなくアングリカンであった。

これらのうち、人口の圧倒的多数を占めたのは第1と第2のグループであった。もっとも、17世紀を通じて第3のグループが飛躍的に増大している。

たとえば、1600年には総人口の2パーセントにすぎなかったイングランドとスコットランドからの移住者は、1660年には18パーセント、1733年までには27パーセントになっている⁽⁹⁾。にもかかわらず、支配エリートとしての国教徒は常に少数で、1700年前後は全人口の約10パーセントを占めるにすぎなかった⁽¹⁰⁾。そのため、アイルランド教会の財政事情は厳しく、下級の聖職者たちは幾つかの教区を兼務するのが普通であった。また宗教施設も貧弱で、信者がいないためにほとんど使用されず、荒れ放題という教会も決して珍しくはなかった。そしてそれは、国教徒が比較的多く住むダブリンから遠ざかれば遠ざかるほど、しばしば目にする光景であったのである。

III

スウィフトの赴任したアントリム州のキルルート教区は、ダウン・アンド・コナー (Down and Connor) 主教区に属し、ジェームズ1世治下の1609年以来、1つの教区牧師聖職禄 (rectory) と2つの代理牧師聖職禄 (vicarage) からなっていた⁽¹¹⁾。ここでアイルランド教会の組織を概観しておくならば、アイルランドの場合も、イギリス国教会の組織に倣って大主教を頂点とする整序づけられたヒエラルヒー構造にあった。そしてその内容も、イギリス国教会の場合と基本的に同じであった。すなわち、アイルランド教会はアーマー (Armagh)、ダブリン、カシェル (Cashel)、トゥアム (Tuam) の4つの大主教管区 (province) からなり、4人の大主教 (archbishop) がそれら大主教管区の頂点に立っていた。そのうち、「全アイルランドの首席主教」 (Primate of All Ireland) であるアーマー大主教が最上位であった。次席は「アイルランドの首席主教」 (Primate of Ireland) と称されたダブリン大主教で、カシェルとトゥアムの大主教はそれぞれ「マンスタンの首席主教」 (Primate of Munster)、「コナハトの首席主教」 (Primate of Connacht) と呼ばれた⁽¹²⁾。ちなみに、スウィフトがキルルートに赴任したときのアーマー大主教は、マイケル・ボイルという耳が遠くて目もほとんど見えず、知力も極端に衰えた80歳半ばの人物であった⁽¹³⁾。このボイルの後任が、トリニティ・カレッジの学長およびカシェルとダブリンの大主教を歴任したナーシサス・マーシュである。またスウィフトと縁の深いウィリアム・キングは、マーシュの後任として1703年にダブリンの大主教になっている。

4大主教管区の下にはそれぞれ3つから7つの主教区 (diocese) が設けられ、各主教区には主教

(bishop) が配された。彼らはイギリス政府によって選任され、さまざまな権能が与えられていた。身分的には貴族と同等と見なされ、上院に議席を有した。主教区付属の土地から得られる収入は魅力的で、最も豊かなデリー (Derry) の場合、主教の年収は2,200ポンド以上あったと言われている。また、キルモア (Kilmore) 主教は2,000ポンド、ファーンズ (Ferns) とレーリン (Leighlin) は各1,600ポンド、ダブリンのクライスト・チャーチ大聖堂の首席司祭を兼ねたキルデア (Kildare) 主教は1,600ポンド、クロンファート (Clonfert) 主教は1,200から1,500ポンド、キララ (Killala) 主教は1,000ポンドであった⁽¹⁴⁾。主教区には主教座聖堂 (cathedral) が置かれた。大聖堂の管理・運営は主教座聖堂参事会 (cathedral chapter) が行い、その任に当たったのは聖堂参事会員 (canon) であった。長は参事会首席司祭 (dean) と呼ばれた。後にスウィフトの得たポストがこれである。彼は1713年にダブリンの聖パトリック大聖堂の首席司祭となり、32年もの長きにわたってその地位にあった。年収は約800ポンドであった⁽¹⁵⁾。もっとも、スウィフトはより高い地位を求めて要人に働きかけしている。しかし、息の根を止めるまでに敵を攻撃する非情な人間性が逆に味方にまで恐れられ、結局のところ、聖界貴族としての大主教や主教になることはできなかった。そのためスウィフトは、アイルランドの地で不満と怒りを募らせていくことになるのである。

主教区の下に、最も小さい単位である教区 (parish) があった。一般に、信者が礼拝などを通して教会と接するのはこの教区教会においてである。教区を管轄するのは教区牧師 (rector) であった。彼らは、十分の一税 (tithe) と教会付属地 (glebe) からの収入を財産権として領収する権限を有していた。十分の一税とは、教会や聖職者の生活を維持するために、教区民が穀物や乾草や家畜など収穫の十分の一を教会に納める制度のことであり、教区牧師の重要な収入源であった。しかし、こうした聖職禄は俗人であっても手にすることができた。その場合、俗人は聖職者としての資格を有していないので、俸給を支払って聖職者を雇う必要があった。これが代理牧師 (vicar) である。代理牧師の俸給の支払い形態は多様で、一定額の給与によるものと十分の一税によるものがあった。ただし後者の場合、代理牧師はその一部しか受け取ることができなかった。教区牧師に納入される十分の一税を大十分の一税 (great tithe) と言ひ、代理牧師に納入されるそれを小十分の一税 (small tithe) と言う。

周知のように、聖職者は法律家および内科医とと

もにジェントルマン的職業と見なされていた。しかし、一般の教区牧師はジェントルマンのように裕福であるわけではなかった。もちろん彼らの収入は多様で、年収200ポンドから300ポンドの牧師もいた。だがほとんどはそれより劣悪で、30ポンドの年収しかなかった者もいたという⁽¹⁶⁾。そのため、とりわけ十分の一税が俗人の手に渡った教区では、収入不足を補うために、幾つかの教区を兼務し複数の聖職を兼領する牧師が多くいた。いわゆる聖職禄兼領(pluralism)である。これは悪弊として中世以来しばしば禁止されてきたものであるが、多くの地域で半ば公然と残存していた。また収入があまりにも少ないために、牧師不在の教区も多数存在した。そのような教区では、牧師補(curate)が雇われることもしばしばであった。牧師補の収入は代理牧師よりも低かった。1719年の規定では、年に20ポンドから50ポンドの幅で給与を支払うべきことが定められている⁽¹⁷⁾。おそらく、平均30ポンド程度であったと思われる。なお、これら下級聖職者の下にさらに執事がいた。執事は教区の職務を助けはするが、聖餐を執り行うことはできなかった。スウィフトの最初の聖職位がこの執事であったことは、本稿冒頭で述べたとおりである。

すでに指摘したように、アイルランドではカトリック教徒である既存住民の改宗にほとんど成功せず、国教会に帰属する者はごく少数に限られていた。そのため荒れ果てた教区が多かった。たとえば、スウィフトの教区のあるアントリム州では、17世紀中葉に65の教区のうち30の教会が廃墟となり、27が牧師不在、51が教会付属地を保有せず、十分の一税も32の教区で俗人の手に移っていた⁽¹⁸⁾。前出したウェクスフォード州のファーンズ主教区においても事情は同じであった。131教区のうち、十分の一税は71の教区で俗人の手に渡り、28の教区で主教と大聖堂所属の高位聖職者のものとなり、一般の下級聖職者の手にあったのは極貧の32教区のみであった。このファーンズ主教区には、主教も首席司祭も大執事(archdeacon)も居住せず、聖務を執り行ったのは、年収約100ポンドの13名の受禄聖職者と年収約30ポンドの9名の牧師補であった⁽¹⁹⁾。1728年には、アイルランド全土に約600名の受禄聖職者がいたが、彼らの大半は牧師館も教会付属地も持っていなかったのである⁽²⁰⁾。

IV

さて、キルルートの属するダウン・アンド・コナー主教区の主教は、アイルランド生まれでトリニティ・カレッジ出身のエドワード・ウォルキントンで

あった。穏健で学識があり、評判の良い人物であった⁽²¹⁾。キルルートにおけるスウィフトの前任者は、ウィリアム・ミルンという、1657年にアイルランドへ移住してきたスコットランド出身の長老派であった。彼はやがて国教会に改宗、63年にキルルートの教区牧師に任命された⁽²²⁾。しかし腐敗した生活ぶりが問題となり、93年に教会委員会(ecclesiastical commission)による調査の結果、非居住、不節制、放縦の廉で聖務停止処分となり、その後解任された⁽²³⁾。教会の腐敗・墮落はいつの世にもあったが、この時代のアイルランドでも例に漏れずしばしば見られたのである。そしてスウィフトがキルルートに聖職禄を得た背景には、前任者のこうしたスキャンダラスな問題があったのである。

キルルートに着いたスウィフトは、1695年3月24日にテンプルコラン(Templecorran)で、4月21日にはバリニューア(Ballynure)で就任式に臨んだ。そして同月28日には、リズバーン(Lisburn)の主教座聖堂で説教を行った⁽²⁴⁾。彼は3つの教区、すなわちキルルート、テンプルコラン、およびバリニューアを兼領した。テンプルコランはキルルートの北と東に接し、バリニューアは北と西に接するそれぞれ幅1マイル半、長さ2マイルの長方形の教区である⁽²⁵⁾。他方、キルルートは幅、長さともに約1マイルの小さな教区であった⁽²⁶⁾。スウィフトの聖職禄はこれら3つの教区を合わせたものであり、年収は約100ポンドであった。その大半は十分の一税によるものであったが、キルルートにおける十分の一税は、俗人であるドニゴル伯爵に渡っていた。またテンプルコランのそれもコーナーの主教に渡り、結局スウィフトが教区牧師として税のすべてを手にすることができたのは、バリニューアにおいてだけであった⁽²⁷⁾。スウィフトが赴任する10年前のキルルートとテンプルコランを描写した一文がある。書き手は土地の名士で、後にスウィフトとも交際したりチャード・ドブスである。

「キルルートの教区はたいへん小さく、十分の一税による全収入は年にわずか40ポンドしかない。大十分の一税はドニゴル伯が所有し、小十分の一税は、スコットランド人のミルンという受禄聖職者〔スウィフトの前任者〕が所有している。住民は(私の家族と私のもとで暮らしている6名を除いて)すべて長老派とスコットランド人であり、教区内には1人のアイルランド人もカトリック教徒もいない。住民の数は100名である。この教区に隣接し、海に面しているのが……テンプルコラン教区である。小十分の一税は前記の受禄聖職者が手にするが、大十分の一税は主教に帰属する。

年価値50ポンドである。……住民は全員スコットランド人で、1人のアイルランド人もカトリック教徒もない。教区牧師とその息子と思われる教会事務員を除いて、すべて長老派である。⁽²⁸⁾」

1人暮らしであったとはいえ、100ポンドの年収では十分ではなかったはずである。もっとも、実際にはバリニューア教区だけでも100ポンド以上の収入があった。スウィフトは、後にキルルートの聖職禄を友人のジョン・ウィンダーに譲っているが、その際ウィンダーにこう言っている。「この問題に関しては知識があるので自信を持って言いますが、バリニューア教区はオート麦エーカー当たり18ペンスとかなり期待でき、雌牛、羊、猫、犬などもいて、年収100ポンド以上になります⁽²⁹⁾」。ここから判断すれば、スウィフトは3つの教区から、計算上は年に100ポンド以上得ていたことになる。しかし、実際はそうではなかった。なぜならば、本来スウィフトの手に入るべき聖職禄から、前出のウィリアム・ミルンへの支払金20ポンドが毎年差し引かれていたからである。すなわち、ミルンはスキヤンダルで職を失ったが、教会委員会はミルンの年齢と貧窮および教会への長年の奉仕を考慮して、聖職禄から年金として彼に20ポンドを与えるとの決定を下していたのである⁽³⁰⁾。したがってそのような事情から、スウィフトの収入総額は年に約100ポンドというのが実情であったのである。

ところで先の引用文からもわかるように、アイルランド北部のアルスター地方には非国教徒、とりわけスコットランドから移住してきた長老派住民が圧倒的に多かった。アルスターへの植民は17世紀の初頭から始まっており、その多くはスコットランドからの入植者であった⁽³¹⁾。名誉革命から1716年までの間に、スコットランドからの入植者は約5万家族もあったという⁽³²⁾。彼らは各教会の牧師 (minister) と平信徒代表の長老 (elder; presbyter) とからなる長老会 (presbytery) を組織し、その上に上級長老会を積み上げて総会 (general assembly) を構成する、いわゆる長老制度 (presbyterianism) をとっていた。アルスター地方の長老派の数は、1718年当時のデリーの場合、国教徒400家族、カトリック教徒400家族に対して、全体の50パーセントに当たる800家族であった⁽³³⁾。ちなみにスウィフトが着任する3年前、国教会のある高位聖職者は、アルスターとりわけアントリム州の現状を次のように記している。

「アルスターで最大多数を占めるプロテスタントは非国教徒である。……長老派の集会にはあらゆる地域から何千もの人びとが押し寄せるのに対し

て、国教会に来るのが10人に満たない教区もあれば、6人に満たない教区もある。これはとくにアントリム州ではごく普通のことである。その州は、アルスターのどこよりもスコットランド人の多い地域である。⁽³⁴⁾」

キルルートの教会はすでに廃墟と化していたが、テンプルコランとバリニューアにはまだ存在し、かろうじて使用することができた。スウィフトが牧師補を雇っていた形跡はないところから、彼は2つの教会を行き来して説教をしたと思われる⁽³⁵⁾。問題は、出席者がごくわずかしかなかったことである。スウィフトはキルルート去って2年半後の1699年1月に、前出のジョン・ウィンダーに、自分の説教は「出席する者なく、屋根もない教会のために書かれたまったく取るに足りない代物だった⁽³⁶⁾」と自嘲気味に述べている。スウィフトは、聞く者もほとんどいない説教を空しさすら覚えながら準備していたことであろう。もちろん彼も、信者を増やすために精一杯の努力をしたはずである。しかし、何らかの成果を上げたという記録はない。国教会はわびしく寂れていた。他方、長老派は信仰心に満ちて活気に溢れている。両派の信者数のあまりにも大きな違いに、スウィフトは愕然たる思いをしたに違いない。熱狂的なまでに信心深い非国教徒に対し、無意識のうちに恐怖感や嫌悪感を抱いたかもしれない。少なくとも、そうした感情を抱きかけののひとつにはなったと思われるのである。後にスウィフトは、『桶物語』(A Tale of a Tub, 1704)の第5版(1710年)に付した「弁明」(An Apology)で、「本書の大部分は13年以上も前、つまり1696年には完成していた⁽³⁷⁾」と書いている。1696年と言えば、キルルートへ赴任した翌年である。『桶物語』で非国教徒の狂信を諷刺した個所は、すでにキルルート滞在中に執筆していた可能性がある。あるいは少なくとも、その着想を当地で得たであろうことは十分に考えられるのである。

テンプルから待望の独立を果たしたにもかかわらず、トマス・シェリダンも指摘したように、「辺鄙な田舎の片隅」での生活は決して快適なものではなかった。「友人も信仰仲間も心地良い会話もなく」、ムア・パークの美しい風景や優雅な生活とは比較すべくもなかった⁽³⁸⁾。テンプルのもとから飛び出して後悔することもあったかもしれない。キルルートの生活について、かつてイーヴリン・ハーディは次のように述べたことがある。「ムア・パークの緑の草木と洗練された上流社会に慣れていたので、スウィフトにはベルファスト湾のうら寂しい海岸は耐え難かった。彼はスコットランド人の長老派を激しく

攻撃し、片意地なまでに嫌悪した。あまりくつろげなかったに違いないが、ドニゴル卿夫妻を中心とする社交界に一時顔を出した以外は、絶え間なく続く教会の仕事から離れて気晴らしすることなどほとんどなかった⁽³⁹⁾」。

スウィフトは自伝で、「彼〔スウィフト〕は当時総督代理をしていたケイブル卿に推薦されて、アイルランドの北部に年収約100ポンドの聖職禄を与えられた。しかし数ヶ月で飽きてしまい、イングランドへ戻った⁽⁴⁰⁾」と書いている。彼のキルルートでの滞在はわずか1年あまりであり、数ヶ月で飽きたというのは本心であろう。幻滅と失意の日々であったと思われる。しかしこの間まったくの孤独であったわけではない。何人かの人たちと知己になっている。たとえば、前出のドニゴル卿夫妻、土地の有力者でテンプルコランの教区委員 (churchwarden) でもあったリチャード・ドブス、バリニューアの教区委員でカリクファーガス市長やアイルランド下院議員を務めたことのあるヘンリ・クレメンツ、アントリム州のカーンマニ (Carnmoney) の教区牧師でキルルートにおけるスウィフトの後任となるジョン・ウィンダー——有名な外交官で、北京駐在イギリス外交代表や南アフリカの喜望峰総督などを歴任したマカートニ伯爵は彼の孫である——等々である⁽⁴¹⁾。

スウィフトはドブスを訪れて、ジョセフ・グランヴィルの『科学的懐疑』(Scepsis Scientifica, 1665)を借りている。そしてその代わりに、テンプルの『雑纂』(Miscellanea)を貸している。スウィフトは、『雑纂』を「読むに値する良い本だ」とジョン・ウィンダーに薦めているが、『科学的懐疑』の方は、「もし『科学的懐疑』が自分のものになるならば、私はそれを火中に投じるだろう。なぜならば、それは詮索好きでお粗末な科学者の戯言の見本だからだ⁽⁴²⁾」と酷評している。グランヴィルはデカルトから出発しつつ、アリストテレスとスコラ的学問を批判して経験的帰納を尊重し、科学的な懐疑を唱えて因果性の確実性をも疑った哲学者である。スウィフトがグランヴィルのどの点に批判的であったのかは不明である。何らかの神学的論拠があったのかもしれないし、単純に哲学的議論が気に入らなかっただけかもしれない。しかしそれはともかくとして、スウィフトがこの辺境の地で如上の人びとと交際していたことは確かである。そしてキルルートで知り合った人たちのなかでも、最も重要なのはジェーン・ウェアリング、別名ヴァリーナであった。

V

スウィフトのトリニティ・カレッジ時代の同期生

に、ウィリアム・ウェアリングという人物がいた。彼はダウン州のウェアリングズタウン (Waringstown) 出身である。この地名から、ウェアリング家は土地の旧家であったことがわかる。彼にはリチャードという弟がいた。このリチャードもトリニティ・カレッジで学んでいる。彼が入学したのはスウィフトより2年後の1684年4月であるが⁽⁴³⁾、スウィフトはリチャードのことも知っていたに違いない。彼らの実家のあるウェアリングズタウンは、ベルファストから約15マイル南西に位置し、馬を利用すればキルルートからさほど遠くない距離である。赴任後のスウィフトは、旧交を温めるためにウェアリング兄弟を訪問し、彼らのいとこである女性と知り合いになったようである。それがジェーン・ウェアリングである。

ジェーンの父親はロジャー・ウェアリングといい、聖職禄を兼領するとともに、1682年から90年までドロモア (Dromore) の大執事を務めた。ジェーンは8人いた子供の長子である⁽⁴⁴⁾。92年にロジャーが50歳にならないうちに死ぬと、おそらくジェーンは未亡人となった母親とともにベルファストで住んだ⁽⁴⁵⁾。スウィフトがジェーンといつどこで初めて会ったのかはわからない。だがともかくもスウィフトは、ジェーンにたちまち熱を上げた。そのときジェーンは21歳で病気がちであった。スウィフトは生涯において3人の女性と謎に満ちた関係を持った。3人に共通するのは、長子で父親がなく、しかも病弱であったことである。そうした身の上の女性に心を動かされるものが、スウィフトにはあったのかもしれない。スウィフトは毒舌家で一見冷酷な人間と受け止められがちであるが、実際は情に厚いところもあったのである。

スウィフトはジェーンを「ヴァリーナ」(Varina)の愛称で呼んだ。エーレンプライスも言うように、WaringのWをVにラテン語化し、gを女性形のaに変えて詩的雰囲気を与えている⁽⁴⁶⁾。別稿で取り上げるステラやヴァネッサの場合と同様、女神を連想させる擬古典的な名前である⁽⁴⁷⁾。恋人に新たな呼び名を付けるのは、スウィフトの習慣であった。またそれは、スウィフトだけのいわば秘め事であった。マリオ・ロッシとジョセフ・ホーンによれば、利己主義者 (egotist) は好きな女性を自分のものにする際、その女性を彼女の世界やそれまでの生活から引き離そうとする。それはあたかも彼女を自分の閉ざされた秘密の世界に引き込んで、そこに監禁してしまうかのようなものである。好きな女性に新たな名前を付けるのは、彼女を自分だけのものにしたいという、まさにこうした心理の表れだとロッシとホーンは考

える⁽⁴⁸⁾。この種の心理がはたして利己主義者だけのものなのかどうか、またそもそもスウィフトが利己主義者であるのかどうかは意見の分かれるところであろう。しかしスウィフトがヴァリーナという彼独自の名前を付けることによって、ジェーンを彼の世界に閉じ込め、自分だけのものにしようとしたのは間違いない。事実、スウィフトは彼女を独占するために、しだいに結婚を考えるようになった。そしてやがてそれを決意するに至るのである。

現在、スウィフトのヴァリーナ宛書簡が2通残っている。最初の1通は1696年4月29日付のものである。この頃、スウィフトはテンプルからムア・パークに戻ってこないかと打診されていた。キルルートの生活に飽きていたスウィフトは、かつてのパトロンの誘いに乗り気になっていた。しかしヴァリーナへの愛はますます強まる。彼はヴァリーナに自分への思いを尋ねた。心は揺れ動いていたのであろう、彼女の態度は煮え切らなかった。そのためスウィフトは結婚してアイルランドにとどまるか、それともムア・パークへ戻るかの二者択一を迫られることになった。彼は、断られた場合は直ちにアイルランドを去る覚悟でヴァリーナに結婚を申し込んだ。生涯における最初で最後の求婚であり、長文の熱烈なラブレターである⁽⁴⁹⁾。

「やきもきした思いこそは、恋する者に必ずつきまとう特性です。実のところそれは、最高の幸福もしくは不幸がかかっている計画を追求するすべての者に言えることです。戦争、法廷、通常の業務においても同様で、快楽や名声や富を求める者は誰でも、その目的を達成するまでは不安で落ち着かないものです。そしてそれはすべて、自然であるばかりかもっともなことであります。なぜならば、激しい願望はほとんど病気と同じだからです。ですから、人がその治療を求めても非難されるべきではありません。私もこの重い病気にかかってしまいました。……でも私の場合は、通常の病気よりも大目に見ていただける事情があります。私の幸福の見通しがすべてかかっている最も愛する方が、私の目の前から永遠に消え去ってしまう危険性に絶えずさらされているのです。ヴァリーナの命は日ごとに衰えています。」

恋の虜となった者が、しばしば陥る不安の感情を表した文面である。おそらくスウィフトの心情を正直に吐露したものであろう。彼はこれまでも何度かヴァリーナを口説いてきた。しかしヴァリーナは、自身の健康状態とキルルートでの生活やスウィフトの収入に不安を感じ⁽⁵⁰⁾、彼の求愛を簡単には受け入れようとはしなかった。

「ひとつの正しい名誉ある行動こそが、彼女に健康を、そして私たち2人に言葉では言い表せない幸福をもたらすでしょう。にもかかわらず、人の幸福に不満を感じる何らかの力に影響されて、彼女は残酷であり続けています。……なぜ私は、自分の希望と恐怖を他人の力や管理に委ねてしまうほど愚かだったのでしょうか?……

この30分間というもの、あなたに何を申し上げてよいのかわからず、ただ紙面を見つめているばかりです。あるいはむしろ、たとえすべてがまったくの繰り返しであろうとも、申し上げるべきことがあまりにも多すぎて、どこから始めてよいのかわからないというのが正直なところでしょうか?」

もはや待ちきれなくなったスウィフトは、ヴァリーナに決断を迫る。その調子は、一見下手に出ているようでいて、その実性急で命令的である。そして時には脅迫的でさえある。スウィフトには、女性の心理の綾を読み取る細やかさはない。むしろ彼は女性の実体を暴き、化粧を落とした貴婦人の醜悪な姿を赤裸々に描いた人物である。女性に対する彼の態度は直線的で、強引であった。少なくとも、そこにはロマンティズムはない。彼は、ヴァリーナは自分の心をもてあそぶ残酷な女だと言う。しかし、彼女に有無を言わせぬまでに最後通牒を突きつけるスウィフトは、ある意味ではヴァリーナ以上に残酷である。それは、あたかもヴァリーナに結婚拒否を言わせようとしているかのごとくである。

「先般差し上げた私の手紙の内容を熟考し、決断をしていただくための時間は十分にあったと思います。たいへんやきもきしながら、あなたのご返事をお待ちしております。もし私の旅行前にあなたをお伺いするのが適当とお考えでしたら、喜んでそのようにさせていただきます。……私はここ〔カリクファーガス〕から舟に乗るかもしれません。さもなければ、2週間後の月曜日にダブリンに向けて出発いたします。そして総督代理〔ケイプル卿〕に暇乞いした後、イングランドへと急行します。あなたの不合理なためらいが私をいつまでここに引き止めておくかは、私に抱いているとおっしゃるあなたの愛の強さ次第です。手短かに言えば、お嬢さん、私は以前お世話になったさる高貴な方〔テンプル〕から、もう一度恩恵を与えようと言っていたいでいるのです。しかもそれは、以前よりもはるかに有利な見通しのあるものなのです。しかしあなたのためならば、それをすべて捨てるつもりだということをここで厳粛に申し上げます。私はあなたの財産など、何一つ欲しいと

は思いません。私に関する事柄があなたの望みどおりになるまでは、あなたは好きな所で好きな方と一緒に暮らしていただいで結構です。私はその間、できうるかぎりの熱意と勇気を持って出世できるように努めます。そして成功することを疑っておりません。

……もしあなたが私のものになる前に、私がアイルランドを去るようなことになるならば、たとえ国王が自分の代理として私をこの国へ送り返したくても、私は二度とアイルランドへ戻りたくはありませんし、戻るぐらいならば、運命がどのような侮辱を与えようともそれに耐えるつもりです。もしそれも致し方ないというのであれば、神の名において、次の恋人のためにお身体を大事になさってください。……ヴァリーナの愛は残酷ですが、それ以上に悲劇的な結果をもたらします。最初から私を蔑んでほしかった。あなたが私に情けをかけてくださったことが、私の不幸の始まりでした。今やあなたの愛は私を破滅に導き、それを完了しつつあります。私は、2週間後にはヴァリーナに永遠の別れをしなければなりません。別れに際して、彼女は私に幾ばくかの愛情を持っていたことを装い、それを証すために少しは涙を流してくれるでしょうか？そして私の友人たちは、私が女性に対する慇懃さを持ち合わせず、彼女を攻略することもなかったとして私を非難し続けるでしょうか？……

さようなら、お嬢さん。……ただこれだけは覚えておいてください。もしあなたがなおも私のものになるのを拒否なさるのならば、あなたのためにこれまで生きてきたように、あなたのために死ぬ覚悟のできた男を、あなたは直ちに、また永遠に失うことになるのだということを。すべてあなたのものである、ジョナサン・スウィフト。」

スウィフトの求婚を、ヴァリーナはいわば予想どおり拒絶した。あるいは断ったというよりも、スウィフトの性急で強引な求愛を受諾することができなかった。ヴァリーナは、スウィフトを全面的に拒否するほど明確な意思表示はしなかったはずである。これまでと同様に、曖昧な態度をとったに違いない⁽⁵¹⁾。彼女からすれば、一種の恋の猶予期間を置いたつもりであり、それゆえこれによって2人の縁が完全に切れたわけではなかった。事実、1699年のスウィフトの手紙から⁽⁵²⁾、これ以降も2人がある程度の付き合いを続けていたことがわかる。そして上のラブレターから4年後の1700年には、今度はヴァリーナの方から結婚の申し込みをしているのである。だがそのときは、スウィフトの熱はすっかり冷めて

いた。スウィフトは返信をしたためているが、事実上断りの手紙であった。われわれは、別稿でその経緯を見るであろう。

VI

ヴァリーナから色好い返事をもらえなかったスウィフトは、予告どおりムア・パークのテンブルのもとへ戻った。キルルートの聖職禄は、友人でカーンマニの教区牧師であるジョン・ウィンダーに譲ることにした。ただし、キルルートを去った後も、スウィフトは不在聖職者 (absenteeism) としてその権利を保有している。彼がキルルートの受禄僧を正式に辞めたのは、1698年1月5日のことである。そしてウィンダーがその職に任命されたのは、同年3月11日のことであった⁽⁵³⁾。ウィンダーは、1717年に死去するまでキルルートの聖職禄を保持し続けている。

スウィフトのキルルート滞在は、結局のところ1年を少し超す程度であった。自伝でスウィフトは、そこでの生活に「数ヶ月で飽きてしまい、イングランドへ戻った。彼は聖職禄を友人に譲り、サー・ウィリアム・テンブルの邸宅で、この偉大な人物が亡くなるまで滞在した⁽⁵⁴⁾」と書いている。テンブルがスウィフトを呼び戻したのは、秘書としての彼の能力を再認識し、その助力を必要としたからである。この点に関する詳しい内容は別な機会に検討するとして、スウィフトは1696年5月の中頃にはキルルートを離れ、サリー州ファーナムのテンブル邸へ戻ったのであった。通算3度目で、最後のムア・パーク滞在である。99年3月頃まで続くムア・パークでの生活は、スウィフトにとってはきわめて有意義なものとなった。諷刺家スウィフトの基礎固めは、ほぼこの時期になされていくのである。稿を改めて考察しよう。

注

- (1) スウィフトは自伝で、推薦されたときケイブルは総督代理であったと書いているが、誤りである。Jonathan Swift, "Family of Swift," in *The Prose Writings of Jonathan Swift*, ed. Herbert Davis and et al., 14 vols. (Oxford: Basil Blackwell, 1939-73), V, p. 194.
- (2) Louis A. Landa, *Swift and the Church of Ireland* (Oxford: Clarendon Press, 1965), p. 8.
- (3) Jonathan Swift, "Ode to the King. On his Irish Expedition. And the Success of his Arms in General," 47-100, in *Jonathan Swift: The Complete Poems*, ed. Pat Rogers (Harmondsworth:

- Penguin Books,1983), pp.44-45.
- (4) Joseph McMin, *Jonathan's Travels : Swift and Ireland* (Belfast:Appletree Press,1994), p.26.
- (5) *Ibid.*,p.30.
- (6) アイルランドにおける宗教改革が、結局のところ失敗に終わったという議論については以下を参照。Nicholas Canny, "Why the Reformation Failed in Ireland : *Une Question Mal Posée*," *Journal of Ecclesiastical History*, XXX, 4 (1979), 423-50 ; Karl Bottingheimer, "The Failure of the Reformation in Ireland : *Une Question Bien Posée*," *ibid.*,XXXVI, 2 (1985), 196-207 ; Steven G.Ellis, "Economic Problems of the Church : Why the Reformation failed in Ireland," *ibid.*,XLI, 2 (1990), 239-65.
- (7) ただし、彼らのすべてが必ずしもイングランド王に不忠であったわけではない。その点については、山本正「ジェントルマンになりきれなかったアイルランド人たち—アイルランドの『イングランド化』と1641年アルスタ蜂起の首謀者たち」(山本正編『ジェントルマンであること—その変容とイギリス近代』刀水書房、2000年) 61-79頁を参照。
- (8) Aidan Clarke, *The Old English in Ireland, 1625-42* (Ithaca,N.Y.:Cornell University Press,1966) ; Alan Ford, "‘Firm Catholics’ or ‘Loyal Subjects’ ? Religious and Political Allegiance in Early Seventeenth-century Ireland," in *Political Discourse in Seventeenth-and Eighteenth-Century Ireland*, ed.D.George Boyce, Robert Eccleshall and Vincent Geoghegan (New York:Palgrave,2001), pp.1-31.
- (9) L.M.Cullen, *The Emergence of Modern Ireland, 1600-1900* (London:Batsford Academic & Educational Ltd.,1981), p.87.
- (10) Barnard, "Reforming Irish Manners: The Religious Societies in Dublin during the 1690s," *Historical Journal*, XXXV, 4 (1992), 806 ; Jim Smyth, "‘Like Amphibious Animals’: Irish Protestants, Ancient Britons,1691-1707," *ibid.*, XXXVI, 4 (1993), 785.
- (11) Irvin Ehrenpreis, *Swift : The Man, His Works, and the Age*, 3 vols. (London:Methuen & Co.,1962-83), I, p.157.
- (12) J.L.McCracken, "The Ecclesiastical Structure, 1714-60," in *A New History of Ireland*, vol.IV: *Eighteenth-Century Ireland, 1691-1800*, ed. T.W.Moody and W.E.Vaughan (Oxford:Clarendon Press,1986), p.84.
- (13) Sir James Ware, *The Whole Works of Sir James Ware concerning Ireland*, 3 vols. (Dublin:Printed by E.Jones & S.Powell,1739-46), I, p.130.
- (14) McCracken, "The Ecclesiastical Structure,1714-60," pp.84-85.
- (15) ルイス・ランダは812ポンドと算定している。Louis A.Landa, "Swift's Deanery Income : A New Document," in *Pope and His Contemporaries : Essays Presented to George Sherburn*, ed.James L.Clifford and Louis A.Landa (Oxford:Clarendon Press,1949), pp.159-70.
- (16) McCracken, "The Ecclesiastical Structure,1714-60," p.86.
- (17) *Ibid.*
- (18) Landa, *Swift and the Church of Ireland*, p.11.
- (19) Walter A.Phillips (ed.), *History of the Church of Ireland : From the Earliest Times to the Present Day*, 3 vols. (London:Oxford University Press, 1933-34), III, p.182.
- (20) McCracken, "The Ecclesiastical Structure,1714-60," p.88. 教区教会の荒廃ぶりについては、William J.Smyth, "Ireland a Colony : Settlement Implications of the Revolution in Military-Administrative, Urban and Ecclesiastical Structures, c.1550 to c.1730," in *A History of Settlement in Ireland*, ed.Terry Barry (London : Routledge, 2000), pp.172-73も参照されたい。
- (21) Ehrenpreis, *Swift*, I, p.157.
- (22) *Ibid.*,p.161 ; Landa, *Swift and the Church of Ireland*, p.12, n.1.
- (23) *Ibid.*,pp.12-15.
- (24) *Ibid.*,pp.15-16.
- (25) *Ibid.*,p.17.
- (26) *Ibid.*,p.18.
- (27) *Ibid.*,pp.16-17.
- (28) Ehrenpreis, *Swift*, I, p.160.
- (29) Swift to the Rev.John Winder (1 April 1698), *The Correspondence of Jonathan Swift*, ed.Harold Williams, 5 vols. (Oxford:Clarendon Press,1963-65), I, p.27 ; *The Correspondence of Jonathan Swift,D.D.*,ed.David Woolley, 4 vols. (Frankfurt am Main:Peterlang,1999-2007), I, p.132.
- (30) Landa, *Swift and the Church of Ireland*, p.14.
- (31) J.C.Beckett, *The Making of Modern Ireland, 1603-1923* (London:Faber & Faber,1966), pp.43-48. なお、ジェームズ1世時代におけるスコットランド人のアルスター移住に関する詳細は以下を参照。M.Perceval-Maxwell, *The Scottish Migration to Ulster in the Reign of James I* (London:

- Routledge & Kegan Paul,1973). また、彼らの移住を促進させた理由については、W.A.Macafee and Valerie Morgan, "Population in Ulster,1660-1760," in *Plantation to Partition : Essays in Ulster History in Honour of J.L.McCracken*, ed.Peter Roebuck (Belfast:Blackstaff Press,1981), pp.46-63が参考になる。
- (32) J.L.McCracken, "The Social Structure and Social Life,1714-60," in *A New History of Ireland*, vol.IV : *Eighteenth-Century Ireland, 1691-1800*, ed. T.W.Moody and W.E.Vaughan (Oxford:Clarendon Press, 1986), p.39.
- (33) *Ibid.*,pp.39-40.
- (34) James S.Reid, *History of the Presbyterian Church in Ireland : Comprising the Civil History of the Province of Ulster, from the Accession of James the First*, 3 vols. (Belfast:W.Mullan,1867), II, p.391.
- (35) Landa, *Swift and the Church of Ireland*, pp.22-23.
- (36) Swift to the Rev.John Winder (13 Jan.1699), *Corr.*,ed.Williams, I, p.31 ; *Corr.*,ed.Woolley, I, p.138.
- (37) Jonathan Swift, *A Tale of a Tub*, in *Prose Writings*, I, p.1 (中野好之・海保真夫訳『スウィフト政治・宗教論集』法政大学出版局, 1989年, 49頁).
- (38) Thomas Sheridan, *The Life of the Rev. Dr.Jonathan Swift, Dean of St.Patrick's, Dublin*, *Swiftiana* XV (1784;rpt. New York:Garland Publishing,1974), pp.19-20.
- (39) Evelyn Hardy, *The Conjured Spirit Swift : A Study in the Relationship of Swift, Stella, and Vanessa* (1949;rpt. Westport, Connecticut:Greenwood Press,1973), p.51.
- (40) Jonathan Swift, "Family of Swift," in *Prose Writings*, V, p.194.
- (41) Ehrenpreis, *Swift*, I, pp.162-64.
- (42) Swift to the Rev.John Winder (13 Jan.1699), *Corr.*,ed.Williams, I, p.30 ; *Corr.*,ed.Woolley, I, p.137.
- (43) *Corr.*,ed.Williams, I, p.19, n.1.
- (44) *Corr.*,ed.Woolley, I, p.128.
- (45) Ehrenpreis, *Swift*, I, p.165.
- (46) *Ibid.*
- (47) Phyllis Greenacre, *Swift and Carroll : A Psychoanalytic Study of Two Lives* (New York:International Universities Press, 1955), p.33.
- (48) Mario M.Rossi and Joseph M.Hone, *Swift or the Egotist* (London:Victor Gollancz,1934), p.231.
- (49) Swift to Jane Waring (29 April 1696), *Corr.*,ed.Williams, I, pp.18-23 ; *Corr.*,ed.Woolley, I, pp.124-27. 訳出するにあたっては、有田昌哉『ジョナサン・スウィフトと女性たち』(近代文芸社, 1997年) 33-37頁を参照させていただいた。
- (50) Irvin Ehrenpreis, *The Personality of Jonathan Swift* (London:Methuen & Co.,1958), p.13.
- (51) Katharine M.Rogers, "Jonathan Swift's Attitude toward Women," Ph.D.dissertation, Columbia University,1957, p.11.
- (52) Swift to the Rev.John Winder (13 Jan.1699), *Corr.*,ed.Williams, I, p.31 ; *Corr.*,ed.Woolley, I, p.138.
- (53) *Ibid.*,p.133, n.1.
- (54) Jonathan Swift, "Family of Swift," in *Prose Writings*, V, p.194.